

「空手道で一番苦しかったこと」

平成20年9月6日

西東京本部 浜田山支部 上村浩一

私が空手を始めたのは、長女と長男が平成十四年に月心会に入門したことがきっかけでした。最初のうちは、一緒に練習すれば子どもも長続きするし自分の運動不足も解消出来るといった簡単な気持ちでした。当然のことながら何十年も動かさずにいた体が急に柔らかくなるはずもなく、簡単な型をこなすだけでも大汗をかく始末で、正直毎週通うのは子供たちだけにさせようかと考えもしていました。そのうちに長女も十級昇級審査の型で優勝したりして、ようやく親子で一緒に空手を練習するのが楽しみになってきました。しかし妻が大きな手術をすることになり、転機を迎えました。私は会社に休職を依頼し妻の実家からの支援を得ながら、家事・育児

を行う毎日が始まりました。当然私は月心会を脱会あるいは休会するつもりでしたが、子供たちの不安に満ちた目を見て自分の過ちに気づきました。子供達と一緒に時間を過ごせるのは空手しかなく、この心のつながりを無くしたら家族はバラバラになると悟りました。ようやく道場に通うことが出来るようになってりましたが、大きな問題が一つありました。当時一歳の次男をどうするのかということでしたが、結局市川本部長のお許しを得て道場の後ろで寝かしつけながら練習を続けさせていただきました。このようにしていろいろな方のご好意と支援を得てようやくここまで来る事が出来ました。深く感謝しますとともに、苦しかったことを忘れずに今後も精進してまいります。